

### < 目的 >

家庭科教員養成課程における模擬授業の特色及び問題点を明らかにし、その改善を図るため、これまで学生の自己評価を中心に検討を行ってきたが、本報では模擬授業の授業記録をもとに教授－学習活動の分析を行った。

### < 方法 >

長崎大学教育学部において平成元年度に家庭科教育法Ⅱを受講した学生、4年生12名、3年生5名、計17名が1989年11月29日から1990年1月17日にかけて模擬授業を実施した。その授業分析をS-T授業表示法及び教授－学習活動のカテゴリー分析によって行った。

### < 結果 >

1. 授業設計の段階と実際に行った授業では、各教授活動、学習活動に充てた時間に差異がみられた。加えて、初めて授業を実施した3年生の場合、教授－学習活動の構成自体から大幅な変更を行っていた。
2. 教授活動は大きく5つに分類することができた。その中でも特に「挿話」は、家庭科教育における独自の活動として捉えられる。また、学習の位置づけを援助する教授活動として「予告」を行っていた。
3. 学習活動は3つに分類できたが、活動内容は変化に乏しいものであった。また模擬授業の場合、学習者側からの教師に対する働きかけが消極的になっていた。